

2000年 知られざる国・アフリカ・ナミビア共和国を訪問



大野 正夫

2000年 6月17日より29日まで、ナミビアに滞在した。3日間のナミビア政府主催の『沿岸域保全の国際シンポジウム』の政府招聘講演の依頼があり、10日間ナミビア各地を訪れた。60歳の時であった。

海藻研究者の知人、南アフリカのヨハネスブルグ大学、クリチエリー教授(英国人)は、南アフリカの治安が悪くなりになり、1998年に隣国のナミビア大学教授に転職していた。彼の推薦でナミビア行きとなった。

シンポジウムとなっているが、国外からの招聘講演者は10数名で、ナミビア国内の研究者、政府関係者、企業から30名ほどのワークショップであった。ホテルを借り切り、このホテルに全員宿泊し、シンポジウムが行われた。水産大臣、鉱物資源局次長も、同じホテルに泊まっていた。

ナミビアは、上図に示すように南アフリカ共和国の西側上方にある国で、第二次世界戦争前までドイツの植民地であった。ナミビアの名称は「何もない」という現地語に由来しているそうである。国土の8割は砂漠である。原住民はいなく、植民地時代にダイヤモンド鉱山が開発されて、周囲国のアフリカ人が労働者として移入した多民族国家である。93%がアフリカ人で、7%がヨーロッパからの白人である。戦後、南アフリカ共和国の委任統治地域となり、西アフリカ地区と呼ばれていた。ドイツ系の人達が多く、1960年代から、南アフリカ共和国のアパルトヘイト政策に反対した。そのために独立運動が起り、国連委託統治ナミビア国となった。1990年に完全独立国・ナミビア共和国となった。最後の植民地からの独立国になった国である。

のために、白人とアフリカ人の間に、人種差別ではなく労働者や公務員の給与に人種差別がないとされている。しかし7%の白人が70%の収入を得ていると聞かされた。植民地以来のドイツ系会社経営者と労働者の格差であろう。大学に白人女性教授の旦那がアフリカ人であるカップルは幾人かいいる。夫婦生活はうまくいっているそうである。国土は日本の2倍であるが、人口は249万人と小国である。小さい国ほど国の政策運営が容易なのだろう。原住民はいなく、移入アフリカ人達であり、奴隸制度もなかったので血縁的な争いはない。

首都は、サバンナ平原の中にあり、ほぼナミビアの中央にある。南アフリカ以外の国からの定期的な直行便はなく、南アフリカのヨハネスブルグ空港で乗り換えて入国する。ヨハネスブルクから、小型ジェットなので低空で飛び、砂漠やアフリカのサバンナ平原の家屋や道路がはっきりと観察できた。



左の写真は、砂漠地帯で、ぽつぽつと平坦な岩石の台地があった。

左の写真は、首都に近いサバンナ平原で、いくつか集落があり、農業を行っているような家屋があった。

国立ナミビア大学

ドイツ植民地時代からの歴史を持つナミビア大学は、ナミビア国の唯一の総合大学である。小国とは思えない広いキャンパスで塀がなく、どこまでが大学構内か、わからない。法学部から医学部など10学部ある。研究レベルが高く、海外から多くの研究者が集まっていた。高所得者が多く、税収多くあり、大学運営費が豊かなのであろう。理学部長は海藻研究者で、タンザニア大学教授から転職した。私の知人でもある。彼がクリッチリー教授をこの大学に招へいた。大学教授の給与は高収入であった。研究機材も充分に整っていた。



ナミビア大学からみたキャンパス。左のビルが理学部棟。

世界3位の広大なナミビア国立野生動物園

公園の柵はあるが、動物はすべて放し飼いである。危険な動物がいないので、クリッチリー博士と一人息子と3人で入園した。小型トラックを改造した自動車で、数人以上集まると走り出す。決まったルートではなく、動物を見つけると運転手が、そこへ向かう。一時間くらいあちこちを走って廻り、運転手が動物の名前を教えてくれた。適当に、動物たちに餌を与えていたのだろう。

首都と言っても、日本の田舎都市に似て、歩道を歩く人は少なく、のんびりした雰囲気である。ダウンタウンと言うところがない。教会や学校があるが、買い物は一つのデパートで揃う。「一人歩きをしても大丈夫か」と、クリッチリーに尋ねると、「銃砲保持は禁止であるので、強盗はないが、自動車には気を付けねばならない」と返答された。自動車道が広くて信号が少なく、速度制限もないそうだ。



ナミビア国立野生動物園

リューダリツに向かう

首都ビントホクはサバンナ平原にあるが、シンポジウムが開催されたリューダリツは、大西洋に面する漁業の都市である。ナミビアでは唯一の巨大漁港を持ち、大型ジェット機が離着陸できる

空港がある。

なぜ2000m級の滑走路があるかと言うと、この漁港は大西洋マグロ船が寄港する。栄養塩の豊富は南極海の湧昇流が沿岸に流れしており、大型海藻が多く、イセエ漁獲量は甚大、ウニ、カニなど沿岸魚介類の水揚げも多く、ジェット機が、毎日、ヨーロッパに飛んでいる。

しかも海岸に沿って、南北に1300kmも続くナミブ砂漠が広がっている。ナミブ砂漠にある「ナミブ・ナウクルフト公園」は、世界最古の砂漠のひとつで、鉄分が多く「赤い砂漠」と言われており、世界の観光客にとって憧れの的である。砂漠に咲く花は、短い期間であるが、広大な花畠になる。砂漠のなかでも、最奥部の「ソススフレイ」では、アプリコット色の赤い砂漠をみられ、300mもの高さを持つ世界最大の砂丘群が連なる光景は圧巻である。ヨーロッパからの観光客は、この空港に、直接大型ジェット機で降り立つ。

ナミビアは、“人が住めない砂漠”であったが、ドイツの植民地になったのは、砂漠の中に、ダイヤモンドが眠っていたことによる。訪問した2000年の年のナミビア国の収入の3分の1はダイアモンドであった。以前は、ほとんどの財源はダイアモンドからの収入であった。1999年次の財政収入は、水産物と家畜肉からの収入が3分1、観光資源からの収入が3分1と言われた。

ところが1990年の建国の頃より、ダイアモンドが海中、特に浅い沿岸の砂地や岩盤を削り、ポンプで吸い上げるダイアモンド採掘法が盛んになり、沿岸魚介類が荒らされているということで、今回のシンポジュムが開催された。

首都ビントホクとリューダリツの間には空路があるが、砂漠を自動車で走る案をクリチユリー博士は考えた。遠方から来た筆者へのサービスである。ワゴン車に彼の友人3人と筆者の4人が乗り込み、早朝に出発した。予定では12時間の行程であった。

ビントホクの街からは、どこまでも直線で整備した自動車道を走った。窓からは断層からできた平坦な台地が、時折見えて圧巻な景観であった。



整備された自動車道



断層できた広大な台地

砂漠地帯に入る前に、ガソリンステーションに立ち寄った。2個のガソリンタンク、2L入りの水一箱、缶詰一箱を積み込んだ。このような商品がガソリンステーションに揃っていた。大きな砂嵐が吹くと、1日～2日間も車内で待機することもあるそうだ。道路は絶えず、除砂車が走っており、両側は少し高い土手になっており、車が飛ばされることはない。それでも、今回、時々、小さな砂嵐があり、前方を砂が走り、道を遮ることがあった。砂漠のなかに、時速30kmの標識が立っていた。砂嵐の通り待ちであろう。砂漠のなかに、ダイヤモンド鉱山の廃坑町がいくつかあった。砂漠のなかで、どのような生活をしていたのだろうか。



砂漠のなかにあるダイヤモンドの廃坑町の住宅とオフィスビル、作業場

国際シンポジュムの開催

招へいされた研究者は、主に欧米諸国の海洋生物研究者、鉱山関係研究者と自然保護団体であった。講演は一つの会場であり、生物研究者と鉱山研究者が順番に話すので、筆者には知識のないダイヤモンドの掘り方なども写真などで理解ができた。海からダイヤモンドを探掘する方法は水深10mくらいの砂地や岩場を熊手を引きずり、後ろに多くの口を開いたパイプが接続しており、砂や小石ごと吸い取る簡易な方法であり、汲み上がった砂礫からダイヤモンドを探す方法がある。砂漠生活より楽でだろう。

筆者は、日本の藻場造成の話をして、磯掃除で剥がされた岩には、再度周囲から種苗が侵入していく。乱獲でなければ岩場が掃除されるので、計画的な採掘方法を企画すれば、新たな藻場造成にもなると講演して、評判は良かった。ダイヤモンド採掘に反対の自然保護団体のパネルが多かった。鉱物関係者はダイヤモンド採掘が、海の資源の減少にならないという持論であった。

水産研究者は、計画的なダイヤモンド採掘は、岩を爆発することもなく、主に砂地を吸い取るので大きな問題がないとの結論であった。長く激論することもなく、お互いの意見をすり合わせる会合であった。

現在、水産資源の減少は見られず、ダイヤモンド海中採掘は増えてゆくことだろう。クリ彻エリーの紹介で、若いイサンボ水産大臣と親しくなった。食事会やコーヒーブレイクで一緒になることが多かった。5月に日本に行く予定があるということで、日本事情を知りたかったのである。大臣でもシンポジウムでは、ひとりで会場を歩きまわっていた。鉱物資源局長も参加してたので、ナミビア国としては、この会合は、重要な会議であったことを知った。



私と行動を共にしたProf. Crichely 左:Dr. Abraham Iyanbo漁業海洋資源大臣

沿岸の海藻観察ツアー

この会議のツアーとして沿岸の海藻観察ツアーがあった。太平洋に面する海岸は岩礁地帯で、沖合は南極海からの湧昇流が沿岸に届いている。世界でも有数の栄養分の多い海域で水産資源の宝庫と言われてきた。普段は風が強く荒れる海で、帆船時代は難破することが多く、乗組員は遠方に南端の岬が見えると、ほっとした。そこで、その岬を喜望峰と名付けた。岬を目標に帆を張ったと言われている

沖合で遭難した帆船時代の十字架の碑が立つ高台に上がり拝礼して、海岸へ降りた。海岸に降りると驚くほど打ち上げ海藻があった。ケルプを持つ筆者の後に黒くなっている物体が、打ち上げ海藻である。



海上で遭難した碑の前で海を見る

打ち上げ海藻のKelp(コンブ類)を持つ

寒天の原料・オゴノリ養殖視察

ここには、大きな漁港と少し離れたところに、奥の深い入り江がある。そこで、クリ彻エリー博士らの指導で、オゴノリ養殖が開始されていた。事業規模でのオゴノリ養殖は、世界的にもここが最初であろう。ドイツ人が経営しており、日本の伊那食品工業㈱が、寒天原料として輸入していた。粘度(粘り)が高く、粘度の低いインドネシア産のオゴノリと混ぜて、使っていたことを後年知った。2010年代から、中国で大量のオゴノリ養殖が始まり、競争力に勝てず破産することが分かり、利益のある時に撤退したと言う。ドイツ人らしい。



左:ペットボトルを浮きに使っていたオゴノリ養殖(養殖監督官と作業人)、
右:採取されたオゴノリ

アブラハム・イサンポ漁業海洋資源大臣の訪日とJICA本部での会合

シンポジュウムで親しくなったイサンポ大臣の訪日のことで、水産庁の遠洋課鯨班の譜久山さんからFAXが届いた。私のFAX番号を控えていたのだろう。食事会の時に、6月頃に鯨の会合で日本に行くから、日本で会おうとは言っていた。ナミビアは、当時、日本の南氷洋の鯨捕の獲賛成国であった。その時から、私の名刺を持っていたのだろう。先に、私のところに彼からメールが届いていたので驚かなかったが、水産庁から連絡があるとは思わなかった。彼からJICA本部にゆきたいとメールに書かれていた。シンポジュムの話のなかで、ナミビアの国作りにはJICA支援を得ることができると話した記憶があった。

早速、水産庁の譜久山さんに、『彼はJICA本部を訪問したいという希望がある』と連絡した。譜久山さんは、『JICAへの段取りは、私共がします』と、段取りを快諾した。大臣一行は5名であった。

8月5日、筆者は早朝の便で東京へ向かった。東京への旅費は水産庁から出た。大臣一行は赤坂のプリンスホテルに宿泊していた。イサンポ大臣は、ナミビアでわずかの時間しか会っていなかったが、親友のように気さく、私に接し、明るく親しみが持てた。随行員のスタッフと一緒に昼食を取り、水産庁が用意したハイヤーで、JICA本部の会議室に向かった。美人秘書の案内で大きな会議室で、カメラマン付きで副総裁とアフリカ担当課長、アフリカ課担当員、秘書と2時間くらい

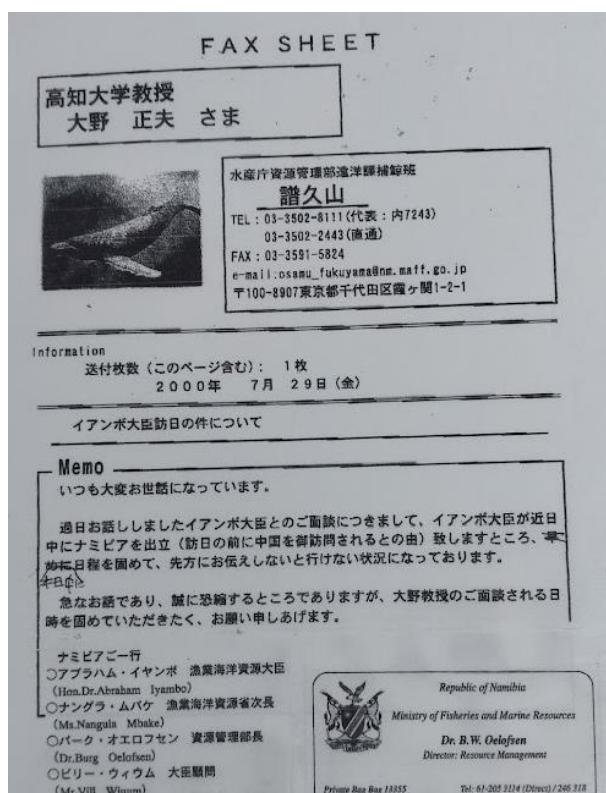
の話し合いをして、彼らも満足して別れた。その後、私のJICAへの橋渡しがうれしかったようで、令状が届いた。多分、鯨の会議訪日と、もう一つの目的にしていたのは、JICAとのパイプであつたかもしれない。

その後、JICAはどのような支援をしたか定かでないので、この原稿のために、ネットでみると、ナミビアは人口 280 万人の小さな国であるが、2004 年にJICAナミビア支所が開設し、所長以下、3 名の日本人が常駐している。イサンボ大臣の直接のJICA訪問の効果があつたかもしれない。

2024 年のナミビア支所の現状報告では、次のように書かれている。

「ナミビアは、豊富な鉱物、牛肉・水産物の輸出、観光資源などを基盤に、国全体としての経済は比較的安定し、高中所得国に位置付けられています。しかし、深刻な失業問題及び大きな経済的格差があり、いまだ多くの貧困層を抱えています。このような現状への対策のため、JICA は、(1) 経済成長を支える産業基盤の強化、(2) 地方農村部における生活向上を重点分野として支援しています。」

昔も今で、経営者が高収入のようだ。収入源が 20 年前と同じである。日本人が参画すれば、多くの雇用を要する海藻産業が起こせる国である。しかし筆者には提案する余力がない。アフリカ諸国で高中所得国のランクにあるのは、南アフリカ、モーリシャス、ケニアとナミビアだけである。



JICA本部会議室で副総裁と会談